

# 立山と地獄の歴史地理学的研究

## —立山地獄が生まれた経緯と背景—

仲 あずみ

(佐々木高弘ゼミ)

### <目次>

#### 第1章 地獄と信仰

##### 第1節 地獄について

##### 第2節 十王信仰と成り立ち

##### 第3節 日本の地獄信仰

#### 第2章 山岳信仰の歴史地理学的研究

##### 第1節 環境知覚研究

##### 第2節 立山と山岳信仰

#### 第3章 立山の地獄信仰

##### 第1節 立山開山縁起

##### 第2節 立山と地獄信仰の融合

##### 第3節 立山曼荼羅

##### 第4節 おんばさま

#### 第4章 都から見た立山の姿

##### 第1節 「延暦寺護国縁起」から

##### 第2節 「六月晦大祓」から

##### 第3節 「延喜式」から

#### 終章 結論

##### 結びにかえて

### 第1章 地獄と信仰について

#### 第1節 地獄について

地獄とは、悪行を積んだ者が墮ちる世界のことであり、その罪状に応じてありとあらゆる責め苦を負わされる世界である。

衆生が自ら作った業により生死輪廻を繰り返す6つの世界、「六道」（餓鬼道、畜生道、修羅道、地獄道、天界道、人間道）の一つとされ、その中でも最も恐ろしい世界であると伝えられている。

日本に伝わる地獄について書かれた書物は「俱

舎論（くしゃろん）」、「大智度論（だいちどろん）」、「正法念処経（しょうほうねんしょきょう）」など数多く存在するが、その中でもっとも代表的な書物は「往生（おうじょう）要集（ようしゅう）」であろう。

「往生要集」の作者は天台宗の僧・源信。「往生要集」の末文によると、源信は永観2年（984）冬12月に比叡山延暦寺横川（よかわ）の地で撰述を開始し、翌寛和元年（985）4月に「往生要集」3巻を完成したという。「往生要集」は、それまで死霊鎮送の真言陀羅尼との区別も定かでなかったような念仏に、往生業としての異議を始めて明確に理論化・体系化した書物として、完成直後から浄土教家・念仏者の間で評判になった。

そして今回「往生要集」の中で最も着目すべきは、地獄と極楽について細かく説明している点である。同書で源信は、インドの仏典に描かれた地獄や極楽を要約・整理し、極楽浄土の莊嚴と地獄の恐ろしさを述べ、さらに極楽往生の方法について細かく説明しているのだ。

当時は「末法思想」と呼ばれる、仏の教えが一切届かぬ時代（末法）が到来するという思想が信じられており、その時代の到来を恐れていた。そこで源信は「往生要集」を撰述することにより、末法を乗り切る方法を教え諭した。簡単に説明すれば、念仏に励むことによってその功德により死後極楽往生できれば、仮にこの世が末法の暗闇に染まっても明るい死後の世界が待っているという内容である。

しかし、その内容は人々に安心を与えると同時に恐怖をも植え付けた。「往生要集」には極楽の記述だけではなく、冒頭に恐怖と苦悩に満ちた地獄についての描写が書かれていたためである。

「往生要集」によると、地獄は八大地獄と八寒地獄という2つの地獄に分けられ、さらに八大地獄はその名の通り等活・黒繩・衆合・叫喚・大叫喚・

焦熱・大焦熱・阿鼻（無間）と呼ばれる8種類の地獄が存在する。そしてさらにその8種類の地獄には、それぞれの罪に合わせた16の別処が附属されているという。それらを合計すると、136もの膨大な数の種類の地獄があることになる。地下一千由旬（ゆじゅん）（古代インドの単位。一説によると約7千キロ）に等活地獄があり、順をなして最下層の阿鼻地獄に至るといふ。

8種類存在する地獄の詳細は、以下の通りである。

#### <等活地獄>

地獄世界の中で最も浅く、比較的罪の軽い者が墮ちる地獄が「等活地獄」と呼ばれる場所である。この地獄は生前に殺生の罪を犯した者が墮ち、此処の亡者達は皆粗暴で喧嘩っ早くいつもお互いに傷つけ殺し合い、獄卒達はそれを楽しそうに煽る。

その一方で、獄卒が鉄の杖や棒で亡者の身体を粉々に砕くか、あるいは料理人が魚や肉をさばくように鋭利な刃物で亡者の肉を裂く。亡者達はこれらの激しい責め苦で一旦は死んでしまうが、涼風が吹くと元の体に甦り、幾度も同じ責め苦を受け続けるのである。

それらの様子は図1の「北野天神縁起絵巻」から伺うことができる。



図1 『北野天神縁起絵巻』（承久本）に描かれた「等活地獄」

#### <黒縄地獄>

黒縄地獄は、主に殺生と窃盗の罪を犯した者が墮ちる地獄である。等活地獄の下にあり、その空間は一辺が一万由旬（約10万キロ）の立方体で、そこで受ける苦痛は等活地獄の十倍だといわれて

いる。

この地獄では、獄卒が熱鉄の黒縄を使って亡者の体に線を引き、それに沿って熱鉄の斧・鋸・刀で切り割く。あるいは巨大な2本の鉄柱が離れて立てられ、柱と柱の間に鉄の縄が張られ、縄の下では煮えたぎる窯が設置されている。そして獄卒達は亡者にサーカスの綱渡りの如く、縄を渡れと強要してくるのである。亡者の中には石を背負って渡らされる者もあり、仕方なく縄を渡ろうとすると、縄は高温で熱せられているせいであまりの熱さに耐えきれず、下の窯に落ちて煮られてしまうのだ。

図2では、右半分に前述した通り獄卒達に黒縄で身体に線が引かれ、その線に沿って鑿（のみ）を入れたり鉤をかけられたり、切り刻まれたりされている亡者の姿が描かれている。そして左面には、燃えさかる鉄の鍋に放り込まれ、熱湯で煮られている亡者の様子がうかがえる。



図2 『北野天神縁起絵巻』（承久本）に描かれた「黒縄地獄」

#### <衆合地獄>

衆合地獄は黒縄地獄の下にあり、空間は一辺が一万由旬（約10万キロ）の立方体と黒縄地獄と変わらない。この地獄は殺生と窃盗に加え、邪淫（夫または妻以外の異性との情事など、人の道に外れた性行為）の罪を犯した者が墮ちる。

その地獄では、亡者達は2つ並んでそびえる鉄山の谷間に投げ込まれ、獄卒達が頃合いを見計らって鉄山を押し動かして亡者達を押しつぶすという責め苦が存在する。「北野天神縁起絵巻」にもその様子が描かれており、滝のように流れ出す

血しぶきが恐ろしく、そして強いインパクトを与えている。

中でも、衆合地獄の責め苦の一つである「刀葉林」(図3)は、この地獄の特性を非常に表している。

樹の上には美しい女性がいて、亡者に向かって「汝、如何でここに至りて我を抱かん」と婉然たる笑みを送り、亡者を誘惑する。色香に惑わされた亡者が樹を登っていくと、刀のように鋭い葉で身を切り裂かれる。それでも亡者は血まみれになって登っていく。やっと樹の上に辿り着くが、そこに女性の姿はない。こんどは樹の下に降り、亡者をまた誘惑する。喜んだ亡者は木を降りていき、また鋭い刀葉で身を切られる。このようなことを何度も繰り返し、亡者は身も心も微塵に切り刻まれるというわけだ。



図3 『大地獄絵』極楽地獄図に描かれた「刀葉林」

#### <叫喚地獄>

叫喚地獄は衆合地獄の下にあり、空間は黒縄地獄・衆合地獄と同じ規模(一辺が約10万キロの立方体)である。この地獄には殺生・窃盗・邪淫の他、主に酒に関する罪を犯した者が墮ちる地獄である。

この地獄の特性は、酒を飲む人に対して非常に厳しい点である。酒愛好家で連日豪飲する者はもちろんのこと、日頃ストレス解消などから適量を嗜むような者でさえも情け容赦なく墮とされ、厳

しい責め苦を受ける。現代の我々からしたら「たかが飲酒ごときで厳しすぎるのではないか」と思うだろうが、仏教世界では殺生も当然重罪だが、飲酒も負けず劣らず重罪なのである。

十六小地獄のレポートリーも数多い。旅人に酒を飲ませ、酔ったところで物品を奪ったり殺したりした者が墮ちる「雨炎火石」では、空から焼け石が降り注ぎ、地には「熱沸河」と呼ばれる灼熱の川が流れており、亡者達は石で潰され灼熱の河で溺れていく。水で薄めた酒を売った者が墮ちる「火末虫」(図4)では、亡者の身体から無数の虫が湧き出て、その身体を食べ尽くすという地獄である。



図4 『地獄草子』に描かれた「火末虫」

他にも女性に酒を飲ませて性的暴行を加えた者が墮ちる地獄、相手の無知につけ込み高価な酒を買わせた者が墮ちる地獄、使用人に酒を飲ませて動物を殺させた者が墮ちる地獄など、酒に関する行動全てを地獄に墮とさんばかりにある。

#### <大叫喚地獄>

大叫喚地獄は叫喚地獄の下にあり、規模は黒縄地獄・衆合地獄・叫喚地獄と同じ(一辺が約10万キロの立方体)である。この地獄には、殺生・窃盗・邪淫・飲酒に加えて妄語、つまり嘘つきが墮とされる。その苦しみは、叫喚地獄の10倍であるといわれている。

大叫喚地獄内にある十六小地獄のうち、受無辺苦処(じゅむへんくしよ)と呼ばれる地獄では、獄卒が熱く熱せられた金挟みで亡者の舌を挟んで



抜き出される責め苦があることから、「嘘をつく  
と閻魔様に舌を抜かれる」という言葉はここから  
生まれたものだと考えられている。

#### <焦熱・大焦熱地獄>

焦熱地獄は大叫喚地獄の下にあり、その空間は  
黒縄地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄と同  
じ規模（一辺が約10万キロの立方体）である。  
ここには殺生・窃盗・邪淫・妄語に加え、邪見（因  
果の理法を否定する誤った考え）の罪を犯した者  
が墮ちる。

図5の絵から伺えるように、焦熱地獄では獄卒  
が大きな鉄の串を使って亡者の肛門から頭までを  
串刺しにし、何度もひっくり返して炙るといふ責  
め苦が存在する。



図5 『大地獄絵』極楽地獄図に描かれた「焦熱地獄」

大焦熱地獄は焦熱地獄の下にあり、その空間は  
黒縄地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄と同  
じ規模（一辺が約10万キロの立方体）である。  
この地獄に墮ちる者の罪は焦熱地獄に加えて、尼  
を犯すなどの罪を犯した者が墮ちる。

#### <阿鼻地獄>

この阿鼻地獄は、八大地獄の最下層に存在する。  
阿鼻地獄は別名「無間地獄」と呼ばれており、そ  
の名の通りこの地獄に墮ちた亡者は、一瞬たりと  
も休む間もなく激烈な責め苦を受け続けることか  
らその名がついたといわれている。阿鼻地獄の空  
間は一辺が8万由旬（約80万キロ）の立方体で、  
その中には七重の鉄城があり、七層の鉄網に囲ま  
れている。下方には刀林を巡る18の内と外を隔  
てる壁がある。城の四隅には銅の恐ろしい大狗が  
いて、全ての毛穴から猛火を出している。

阿鼻地獄は、譏法（ざんぼう）（仏教の「法」と「道」  
をそしめる行い）をし、八大地獄の中で阿鼻地獄以  
外へ墮ちる罪を全て犯し、さらに仏教で最も重い  
罪である五逆罪を犯した者が墮ちる。

その五逆罪とは、

- ①父親を殺した罪
- ②母親を殺した罪
- ③修行修学し聖者の域に達した僧を殺した罪
- ④仏を傷つけ、出血させた罪
- ⑤破僧伽罪（仏教教団を破壊した罪、大乘仏教  
を誹謗した罪）

のことである。

阿鼻地獄行きが決まった亡者達は中有（死の瞬  
間から来世における生命の誕生までの時間）で獄  
卒の呵責を受けたのち、地獄の恐ろしい叫び声  
を聞きながら2万5千由旬を巡る。さらに亡者は  
真逆さまの体勢で2千年の長い時間を掛けて墮  
ち続け、ようやく阿鼻地獄に到達する。そうして  
ようやく阿鼻地獄に墮ちた亡者達は他の八大地獄  
とは比べものにならぬほどの苦しい責め空を受  
け、火を吐く猛犬、亡者を丸呑みにしようとする  
大蛇など、他にも名付けがたい異形の動物たち  
によって罪人達は苦しめられる（図6）。



図6 『北野天神絵巻』(承久本)に描かれた「阿鼻地獄」

阿鼻地獄行きが決まった亡者は「火車」と呼ば  
れる火の車によって連れていかれるという伝承が  
あり、火車に連れていかれた亡者は悪行を重ねた者  
という証拠であった。そのため、「亡骸を火車に  
連れていかれた家は末代までの恥」とまで言わ  
れていた。

#### <八寒地獄>

八大地獄と対を成すように存在するのが、八寒  
地獄と呼ばれる地獄である。

八大地獄が炎と病をテーマにした地獄だとすれ

ば、八寒地獄はその名の通り極寒をテーマにした地獄であり、頬部陀地獄（あぶだじごく）、刺部陀地獄（いらぶだじごく）、頬听陀地獄（あただじごく）、臃臃婆地獄（かかばじごく）、虎虎婆地獄（ここばじごく）、嚙鉢羅地獄（うばらじごく）、鉢特摩地獄（はどまじごく）、摩訶鉢特摩地獄（まかはどまじごく）の8つからなる。

この八寒地獄は八大地獄と比べて様子が描かれた地獄絵もなく、「とにかく寒い、身が裂けるほど寒い」という記述しかないことから、謎が多い地獄である。

ちなみに、先述した8つの地獄の名前は、「寒すぎてそうとしか喋れない」という適当な理由から付けられたらしい。

#### <三途の川>

亡くなった者は死後三途の川を渡り、あの世へと向かう。

これは誰もが知っていることであり、臨死体験した者がその光景を見たという話が聞かれるほど有名な話である。

しかし、ただ三途の川を渡るだけではない。渡る前から亡者の罪を謀る裁判が行われており、判明した罪によって渡り方が変化する。善人は渡されている橋を渡ることができ、普通の者は六文銭を払い渡し船に乗る、そして悪人は激流に投げ込まれたり、毒蛇が密集する遙か下流を渡らなければならぬのである。

このように善人・普通の者・悪人の3通りの渡河方法があったことから、「三途の川」という名称がついたといわれている。

#### <女性の地獄>

地獄の中には、女性だけが堕ちる地獄というものが存在する。そのなかでも最も有名なものが、「血の池地獄」と呼ばれる地獄であろう。「血の池」の名称は、月経や出産の出血が不浄を他に及ぼす罪から生まれた。この地獄は血盆池地獄とも別称されるように、「血盆経」というわずか420余字の短文の経典に基づいて創造された。この経典は10世紀（明の時代）に中国で成立した偽経（正式な翻訳経ではなく偽作された経典）で、日本には室町時代の頃に伝来した。

何故女性が血の池地獄に堕ちるのか。それは、女性は出産（および月経）の血で地神を汚したり、

その衣類を洗った川の水で茶を入れて神に供養するため、そうした罪で死後、血の池地獄に堕ちるのだ。

そのほかにも子供を産むことのできない不妊の女性や、何らかの事情によって子供を産むことができなかった女性が堕ちる「石女地獄」など、女性への差別や侮蔑、男尊女卑を含んだ地獄がいくつも存在するのである。

#### <賽の河原>

親より先に死んでしまい、父母の恩に報いることができなかつた子供は、賽の河原に堕ちてしまう。この賽の河原は地獄内にあるのではなく、三途の川を渡る手前で、なおかつ地獄の外側といった、いわばあの世とこの世の境界的な場所に位置するのだという。つまり賽の河原という場所は地獄のようで地獄でない、中途半端な位置づけなのである。

なぜこのような場所にあるのか。それは、「幼くして死んだ子供達は親への恩を返していないので極楽浄土に行くことはできない、しかし、地獄行きとなるとかわいそうである」という考えから創造されたと考えられる。

賽の河原に連れていかれた子供達は、父母への恩返しのために河原に石を積み上げ塔を造る。しかし、せっかく造った石塔も夕暮れになると地獄の鬼が現れて黒金棒で突き崩してしまう。その苦しみは、亡くなった子供達の追善供養を忘れてしまうほどに嘆き悲しむ、親たちの有様に起因するという。そしてやがて、父母の供養によって地藏菩薩が現れ、子供達を救うのである。

こうした賽の河原の信仰は、中国の経典や「往生要集」にも見られず、おそらくは中世末期以降、日本の民間伝承のなかで独自に成立していったものであると考えられている。

#### 第2節 十王信仰と成り立ち

十王信仰とは、十人の王があので亡者が生前に犯した罪を順次裁くという信仰のことである。古代中国に起こった信仰で、日本には平安時代に中国から伝えられ、鎌倉時代以降に大いに広まった。

亡者の罪を取り調べる裁判官を総称して「十王」と呼ばれ、その名の通り10人の王が存在する。

最初の一審は初七日に行われ、それを皮切りに7日ごとに第7審（四十九日）まで行われる。その後第8審が死後百日目、第九審が一年目、第十審が3年目に行われる。

10人の裁判官の王達と、彼等の正体（本地仏）は次の通りである。初七日（死後7日目）は秦広王（不動明王）、二七日（死後14日目）は初江王（釈迦如来）、三七日（死後21日目）は宋帝王（文殊菩薩）、四七日（死後28日目）は五官王（普賢菩薩）、五七日（死後35日目）は閻魔王（地藏菩薩）、六七日（死後42日目）は变成王（弥勒菩薩）、七七日（四十九日）は太山王（薬師如来）、百か日（死後100日目）は平等王（観音菩薩）、一周忌（死後365日目）は都市王（勢至菩薩）、三回忌（死後730日目）は五道輪転王（阿弥陀如来）の順に裁かれる。

このように10人の王達の正体を仏とする考え方は、とりわけ日本で流行したものだが、怖そうな王達も実はその正体が仏なので、慈悲の心で亡者達を裁いているというわけである。

現在でもある人が亡くなると、その遺族は初七日や四十九日の法事などを営むが、その背景にはまさしく十王信仰が存在している。裁判官の王達は、遺族が亡者のためにきちんと法事を行っているかどうかを、監齋使者（仏法を守護する善神）を派遣して調査する。何故法事を行う必要があるのかというと、それは裁判官の王達に亡者の情状酌量を求めるためである。

### 第3節 日本の地獄信仰

江戸時代には十王信仰、とりわけ十王の中でも一番身近で人気があった閻魔王を信仰する閻魔信仰が盛んになり、閻魔堂が数多く造られた。地獄の裁判官にして十王の最高権威である閻魔王は、この世とあの世の境目である冥界にいる。そこから転じて、町や村の境界の外からの災厄から護ってくれると厚く信仰されたのである。江戸の町、つまり現在の東京都にも閻魔様を祀る閻魔堂が数多く建てられ、度重なる震災や戦争などを経て多くは失われてしまったが、それでも今なお百近い閻魔堂が都内の各所に祀られている。

東京都文京区にある源覚寺は別名「こんにやくゑんま」と呼ばれており、鎌倉時代の作と推定さ

れる閻魔蔵は厚く信仰され、江戸時代から続く縁日（1月と7月の15日と16日）には今も多くの人で賑わう。この閻魔には片眼がないが、これは、江戸時代半ばに眼病を患った老婆が閻魔に祈願したところ、閻魔王は自分の右眼を身代わりに、老婆を治癒した。以来、老婆は感謝の印として、好物のこんにやくを断ち、それを供えたとの逸話が残っている。

神奈川県鎌倉にある円応寺は「閻魔堂」または「十王堂」と呼ばれており、鎌倉時代屈指の十王彫刻が祀られている。閻魔大王坐像はその表情から「笑い閻魔」と呼ばれている。

このように、日本各地で祀られている閻魔王は庶民にとって身近な存在であったためか、笑みを浮かべている像が多かったり、庶民を救済したという話が多く残っている。

## 第2章 山岳信仰の歴史地理学的研究

### 第1節 歴史地理学の環境知覚研究

歴史地理学は、他の分野ではできない方法であるゆる観点からアプローチをかける学問である<sup>(1)</sup>。

過去景観の残片を、地図を見る経験とそれに裏打ちされた直感によつて的確に拾い出し、残片のありようそのものや、それらの相互の位置関係にヒントを得て、歴史資料や考古学の成果なども有効に用いながら、その時代または時点の景観を一定の範囲で復元するのが、歴史地理学の基本的な仕事である。その仕事を進めていると、おのずから何故そのような景観が「構築」されなければならなかったのかが読めてくるのだ。つまり、過去にその景観を作った人々の「地表経営」の意図まで読み解くことができ、人々がいかに「地表」に生きたかという歴史、通常の歴史学ではアプローチできなかった歴史の一側面を明らかにすることができる。

このような方法を用いて、歴史地理学の環境知覚研究は、過去の人々がどのように環境を知覚し、どのような地理的行動を行っていたのかを研究するのである。

### 第2節 立山と山岳信仰

富山県の東部に屹立する立山は雄山（おやま）



(標高 3003 メートル)、大汝山 (おおなんじやま) (標高 3015 メートル)、富士 (ふじ) ノ (の) 折立 (おりたて) (標高 2999 メートル) の 3 つの峰の総称であり、これらからなる立山信仰は全国の至る所まで広がっている。そして立山の麓には、芦峯寺と岩峯寺と呼ばれる 2 つの山岳宗教集落が存在する。

そのなかでも芦峯寺村の位置や起源、時代変遷などの芦峯寺の概要を示しておく。

#### <芦峯寺集落の位置>

「芦峯寺」の呼称は村名を示している。

同村の集落は、富山市街から約 30 キロメートル南東の北アルプス立山連峰の山麓に位置し (標高 400 メートル)、立山連峰を源流域とする常願寺川上流の右岸段丘上に載っている。村内の所々から望むことができる立山連峰の様子は、四季を通じてとても美しく素晴らしい。

#### <宗教村落芦峯寺のおこり>

立山は 9 世紀半ば以降、10 世紀初頭までは開山され、天台教団系の宗教者達の一拠点となっていた。しかし、それ以前に、既に諸国の山岳霊場を巡る山林抖擻の行者達の修行場の一所となっていた。それについては、立山連峰の劔岳や大日岳から発見された平安時代初期の銅錫杖頭などの遺物から推測されるが、このほか、平安時代の仏教説話集「大日本国法華験記」や「今昔物語集」所収の立山地獄説話に、諸国回峰の修行者が立山地獄に墮ちた亡霊と遭遇説話が載せられていることなどからもうかがえる。

その後、こうした修行者のなかに立山山麓に定住して宗教活動を実践する者が出始め、次第に組織や堂舎を整えていった。芦峯寺閻魔堂には平安時代の成立と推測される木造不動明王像頭部が一体残っている。同頭部は寄木造で全長は 60 センチメートルもあるが、元はそれに見合う巨大な胴体部も存在していたはずである。同像の存在から、遅くとも平安時代末期頃までには、芦峯寺かあるいはその界隈に諸国回峰の修行者達によって、彼等の守り尊である不動明王に対する信仰がもたらされ、さらに前述の通り、彼等の中で山麓に定住して宗教活動を行う者も出てきて、こうした巨大な不動明王像の安置を可能とする宗教組織や堂舎を形成したものである。

#### <芦峯寺と岩峯寺の争論>

北アルプス立山連峰の山麓に位置する芦峯寺村が標高 400 メートルの高地に位置しているのに対し、岩峯寺は常願寺川右岸扇状地の扇頂部の平野部に位置している (図 7)。



図 7 岩峯寺～芦峯寺 (国土地理院一万五千分の一地形図「五百石」)。太い黒線は立山禅定登山道。

芦峯寺村はその自然環境 (気温・日照時間・水温などの問題) から稲作には適さない村であった。したがって、この村では焼畑・炭焼・木挽などを主な生業としてきた。このような場所的・生業的な面からとらえると、芦峯寺の場所は「ヤマ」～「サトヤマ」として位置づけられ、さらに、その中核である芦峯中宮寺は「山宮」として位置づけられる。

一方、岩峯寺は中世より荘園村落として発達し、稲作を主な生業としてきた。このような場所的・生業的な面からとらえると、岩峯寺の場所は「サト」として位置づけられ、さらに、その中核である立山寺は「里宮」として位置づけられよう。

ところで、芦峯寺と岩峯寺の立山に対する宗教的諸権利、即ち戸銭や室堂入銭の徴収権、山中諸堂舎の管理権などは、当初同権であった。しかし、加賀藩は正徳元年 (1711) 以降、立山に最も近い山宮の芦峯寺には、立山の山自体に関わる宗教的権利 (①「立山本寺別当」の職号の使用権、②六十六部納経堂の設置権及び納経帳の発行権、③山役銭の徴収権、④立山山中諸堂舎の管理権など) を与えず、むしろ山から閉め出すように加賀藩領国外での廻壇配札活動の権利を与えている。

一方、里宮の岩峯寺には、前述の立山の山自体に関わる宗教的諸権利を与えて管理を任せるのであるが、岩峯寺としては不便にも立山山麓から山上までの禅定登山道は一本道となっており (図 7

黒線)、その途上、岩峠寺集落と立山山中との間に芦峠寺集落が障害的に位置しているため、否応なしに芦峠寺を通過せざるをえず、このような状況が何かと論争を起こす元となった。

では何故、平野側に住む岩峠寺に立山の宗教諸権利が与えられ、山に詳しいはずの芦峠寺が山から追い出される形となったのか。それは、山に詳しいが故に加賀藩に危険視されたためと考える。

山岳修行者達は山を駆けるため、必然的に山に詳しくなる。そのため、幕府や各藩が定めた街道や関所を無視して山を駆け、人の目に触れることなく自由に諸国に出入りできる術を持っていたと考えられる。それを、平野に住み山岳に詳しくない武士達が、彼等の行動を恐れたのではないだろうか。

これ以上山に詳しくさせないため、そして目に届かない行動を制限させるために、加賀藩はあえて芦峠寺を山から遠ざけ、岩峠寺と争わせることによって互いの力を削ぐ形に持っていったのである。このような考え方は、戦国時代に一向一揆の存在に頭を悩まされていたであろう加賀藩のことを考えると、むしろ当然の行動かもしれない。

#### <芦峠寺の廻壇配札活動>

山を追われた芦峠寺は、各宿坊家にそれぞれの地域に檀那場（立山信仰の信者がある程度集中して存在する得意先）を形成していた。こうした檀那場は、当初から日本各地に広がりをもっていたのではない。江戸時代前期以降、それ以前に既に中部・東海地方の人々の間で定着していた富士山・立山・白山を巡拝する三禅定の影響を受けながら、次第に拡大していったと思われる。

立山衆徒は毎年農閑期になると自分の檀那場に赴き、立山信仰を布教しながら護符や経帷子を頒布して回っていた。こうした宗教活動を「諸国檀那配札廻り」や「廻壇配札活動」などという。宗徒は様々な護符を刷っていたが、廻壇配札活動の際には、牛玉札を中心に火の用心や諸願成就、護摩供養、御守護などの祈禱札、山絵図、経帷子などを頒布した。また、特に女性の信者には血盆経や月水不浄除、安産などの祈禱札を頒布した。ときには、それぞれの地域の需要に応じ、養蚕祈願札や大漁祈願札なども頒布することがあった。その他、護符に限らず、越中富山の代表的な売薬

魂丹や現地で調達した箸・針・楊枝・扇・元結なども頒布して利益を得ていた。

檀那場では、主に庄屋（名主）宅を定宿としたが、その庄屋は現地で立山講の信徒達をとりまとめる周旋人である場合が多い。護符などの具体的な頒布方法については、まず、衆徒が定宿の庄屋に対し、その村に必要な護符の枚数について注文をとる。それに対し庄屋は人足を雇い、村内の檀家を中心に、ときにはそうでない家々までも巡回させ、村人が必要とする護符の枚数を把握する。衆徒はその枚数分の護符を庄屋にわたし、実質的な頒布は全て庄屋が雇った人足に任せてしまうのである。

こうした活動で大きな宣伝効果をもたらしたのが、立山曼荼羅であった。衆徒は毎年、講元の庄屋宅に宿泊した際、近隣の村人を集め、持参してきたかあるいは同家に預け置いていた立山曼荼羅を座敷の床の間に掛けて絵解きした。曼荼羅の画面から、立山開山縁起・立山地獄・立山浄土・立山禅定登山案内・布橋灌頂法会・立山権現祭礼などの内容を引き出し、節談調で語ったという。そして、男性には夏の立山での禅定登山を勧誘し、女性には秋の彼岸に芦峠寺で行われる布橋灌頂法会の参加や血盆経供養を勧誘した。その際、自分の宿坊での宿泊を勧め、道案内などの便宜をはかることを約束した。

立山の山容や立山信仰の内容をよく知らない人々に、それを立山曼荼羅の具体的な図柄で視覚的に紹介したので、人々の間では難解な教理にもとづく説教よりも、こうした絵解きによる娯楽性豊かな布教の方が好まれ、かなりの人気を得たようである。

### 第3章 立山の地獄信仰

#### 第1節 立山開山縁起

立山は、自然の中で地獄と浄土といった仏教世界が一緒に体験できる、世にも稀な人間救済空間である。そのような立山を、仏の阿弥陀如来のお告げによって開山（仏教修行ができるように、登山道を整備したり堂舎を建てたりする）した人物が、「佐伯有頼」である。

この佐伯有頼の立山開山にまつわる物語を記し



たものが、「立山開山縁起」である。

同縁起には、「類聚既験抄」（鎌倉時代編纂）や「伊呂波字類抄」十巻本の「立山大菩薩頭給本縁起」（鎌倉時代増補）、「神道集」巻四の「越中立山権現事」（南北朝時代編纂）、「和漢三才図会」（江戸時代正徳期の編纂）など、いくつもの種類がみられる。またこのほかにも、立山信仰の拠点村落であった立山山麓の芦峯寺と岩峯寺に、宿坊宗徒や社人により江戸時代中期から末期にかけて制作された「立山大縁起」や「立山小縁起」、「立山略縁起」など数点見られる。

書かれているストーリーの内容はそれぞれ微妙な違いが見られるが、大まかなストーリーは大体同じとみてよい。あらすじは、以下の通りである。

ある日、父に借りた白鷹で狩りをしていた有頼だが、白鷹がいきなり飛び去って逃がしてしまう。そこで白鷹を追い求めて立山山中に入っていた有頼の前に、突然熊が出現する。驚いた有頼が熊を矢で射かけたところ、熊は山中へと逃げていった。山深くまで熊を追っていった有頼がとうとう玉殿窟（ぎょくでんくつ）へ熊を追いつめたが、そこにあったのは阿弥陀如来と観音菩薩、勢至（せいし）菩薩の三尊の仏像が安置されていた。それらを拝んでよく見ると、阿弥陀如来の胸には自分が射た矢が刺さっていた。

阿弥陀如来は有頼に、「私は乱れた世の人々を救うために地獄や浄土などの世界をこの山に表して、お前を待っていた。だからその方法として有若を越中国司にした。白鷹は劔山刀尾天神である。お前は早く僧侶になり、立山を開くがよい」と告げた。

有頼はこの霊異に深く感動して涙を流した。

開山者は越中国司である佐伯有若、あるいはその息子である佐伯有頼とするものが大部分であり、岩峯寺と芦峯寺の宿坊に伝来する江戸時代の立山縁起においては、ほとんどが佐伯有頼に統一されている。

開山の時期はおおむね大宝年間（701～704）とされるが、地方の霊山の縁起においては、その多くが開山時期を役小角の活躍期より古く遡らせ

るという作為が見られ、信憑性は乏しい。

## 第2節 立山と地獄信仰の融合

立山は平安時代の古くから、日本人の間で山中に地獄が存在する山として知られていた。同時代の仏教説話集である「大日本法華験記」や「今昔物語」には、越中立山の地獄は死者の霊魂が集まる場所として書かれている。

その一節が、以下の通りである。

（略）往越中立山。彼山有地獄原。遙広山谷中。有百千出湯。從深穴中涌出。以岩覆穴。出湯鹿強。從巖辺涌出。現依湯力覆岩動揺。熱氣充塞不可近見。其原奥方有火柱。常焼爆燃。此有大峰。名帝釈岳。是天帝帝釈冥官集会。勘定衆生善悪処矣。其地獄原谷末有大滝。高数百丈。名勝妙滝。如張白布。從昔伝言。日本国人造罪。多墮立山地獄云々（略）<sup>(2)</sup>。

地獄の位置について、インドの「俱舎論」や「大毘婆沙論」等の仏教經典には、それは人間が住む世界の地下に重層的に奥深く続く形で存在すると説かれている。一方、もともと外来宗教であった仏教が日本で広まる以前から、日本は天上や地下、山中、海中といった、いわば自分達の住む世界の垂直・水平方向の延長線上の場所を他界とする観念を持っていた。そのなかでも山中を他界とする観念は、日本の国土の大部分が山地や山岳で占められるといった独特な風土・環境のためか、とりわけ強くもたれていたようである。

すなわち古代の日本人は、人が死ぬとその霊魂が肉体から分離して、村里近くの山やあるいは立山のような立派な山へ登ると考えており、山地・山岳を死霊・祖霊の漂い静まる他界としていたのである。

仏教の広まりと浸透にともない、日本ではその土着の他界観と仏教の地獄観が交わり、霊魂の漂い静まる山中こそが、外来宗教の仏教が示す地獄のある場所だと信じられるようになった。つまり、地獄の亡者に対する裁判や責め苦などの具体的な内容は、圧倒的で壮大な体系を持つ仏教に依拠したが、その場所に関しては、自分達の根源的な考えに基づいて、山中に見出したのである。

その際、越中立山は山中に火山活動の影響で荒れ果てた景観を有し、地獄を見出すには格好の場所であった。立山山中の地獄谷、ミクリガ池、血の池などは、4万年前からたびたび起こった水蒸気爆発による爆裂火口であり、なかでも地獄谷では、火山ガスを噴出する硫黄の塔(図8)、熱湯の沸き上がる池、至る所からの噴気が見られ、また特有の匂いも相まって、そこは不気味な谷間となっている。



図8 立山地獄谷の鍛冶屋地獄

福江充は、こうした特異で非日常的な景観が地獄の様子に見立てられ、立山地獄の信仰が生まれたものと考えられる、<sup>(3)</sup>と述べている。

### 第3節 立山曼荼羅

越中立山の山岳宗教に関する絵画史料として、立山曼荼羅と称される絵図がある。それは、立山信仰の内容が、大きな物では掛け合わせて縦160センチ×横240センチの大画面に網羅的に描かれた掛け軸式の絵画のことである。

この、立山曼荼羅の呼称は、富山の郷土史家草野寛正が、昭和11年(1936)に論文「立山姥堂の行事考」(『高志人 一卷一号』高志人社)のなかで用いて以降、研究者の間で次第に普及し、今では一般の人々にも周知されている。しかし江戸時代の芦峯寺文書や立山曼荼羅の軸裏の銘文などに、立山曼荼羅が「曼荼羅」の用語で表現されている場合が幾例も見られるとはいえ、たいていは

「御絵伝」や「有頼由来立山御絵」「開山之行状之御絵伝」などの用語で表現されている。いわゆる密教系の曼荼羅よりも浄土真宗の高僧絵伝などの性格に近いものとして認識されていたようである。

画面(図9)には、立山の山岳景観を背景として、この曼荼羅の主題である立山開山縁起のいくつかの場面をはじめ、立山地獄の様子、阿弥陀如来と諸菩薩の来迎場面、立山山麓・山中の名所や旧跡、芦峯寺布橋灌頂法会の様子などが、曼荼羅のシンボルの日輪(太陽)・月輪(月)や参詣者などと共に巧みな構図で描かれている。



図9 大仙坊A本

一方、別の視点で立山曼荼羅を見ていくと、立山連峰上空の天道や立山地獄谷の地獄道・餓鬼道・畜生道・阿修羅道、立山山麓の人道など、いわゆる六道の表現(六道絵)と、阿弥陀聖衆来迎の表現といった2つのモチーフが描かれており、したがってこの立山曼荼羅は、「六道・阿弥陀聖衆来迎図」とも位置づけることができる。

### 第4節 おんばさま

江戸時代、姥谷川(姥堂川ともいう)の左岸、閻魔堂の先の布橋を渡ったところに、入母屋造、唐様の姥堂が建っていた。堂内には本尊3体の姥尊像が須弥壇上の厨子に祀られ、さらにその両脇壇上には、江戸時代の日本の国数になぞらえ、66体の姥尊像が祀られていた。その姿は乳房を垂らした老婆で、片膝を立てて座す。容貌は特異で、

髪が長く、目を見開き、中には口がカッと開けたものや般若相のものもあり、いかにも恐ろしげである（図10）。



図10 木造姥尊像（芦峯寺閻魔堂所蔵）

現存の像は、いずれも南北朝時代から江戸時代にかけて作られている。現存最古の姥尊は永和元年（1375）に成立したものである。この異形の姥尊は、芦峯寺の人々にはもとより、越中国主佐々成政や加賀初代藩主前田利家らの武将達にも、芦峯寺で最も重要な尊体として位置づけられ、篤く信仰されてきた。

立山山麓の芦峯寺と岩峯寺は、ともに立山信仰に関わる宗教村落だが、その基層の信仰内容は大きく異なる。端的に言うと、芦峯寺は姥尊信仰が基層であり、岩峯寺は刀尾天神信仰が基層である。それゆえ、芦峯寺の姥尊お召し替えや布橋大灌頂法会などの行事を含め、同村の立山信仰の内容を理解するには、その基層の姥尊信仰を見ていく必要がある。しかし、姥尊はなかなか複雑かつ不思議な尊格であり、その起源は未だに判明していない。起源や正体を巡り、これまで先学諸氏の間でたびたび議論が成されてきている。

#### 第4章 都から見た立山の姿

平安時代から既に「地獄が存在する山」として都である京都に伝わっていた立山。では何故都から遠く離れた立山の地に地獄がある、という話が

伝わるようになったのか。立山地獄の説話が生み出された理由を、3点提示して論じる。

#### 第1節 「延暦寺護国縁起」より

そもそも、誰が立山の存在を都に伝えたのか。それは、比叡山延暦寺に所属し、全国の山岳を修行して回っている山岳修行者達である。

当時の比叡山延暦寺には宗教研究センターのようなものが本山に存在し、学問に励む者とそれができない、所謂“落ちこぼれ”が存在した。その“落ちこぼれ”と呼ばれた者達が実地に出て行き、全国を修行し回る「修験者」が現れるようになったのである。そして彼等が本山に帰ってくる度、都の貴族達は彼等から各地の話をこぞって聞きたがった。そして、それらの話を集めてまとめたものが「今昔物語」や「大日本法華験記」である。

つまり、山岳修行者達が情報メッセンジャーとなり、あちこち巡っては都に情報をもたらしてきたのである。

そして山岳修行者達の中心である比叡山延暦寺は、都から見て丑寅の方角、つまり鬼門の方角に位置している。鬼門は「鬼や不浄なものがやってくる方角」として忌避されており、平安京遷都のときも「此所四神相応之地也。然而當東北有一高岳。以東以北即是鬼開也。適雖得四神相応之靈地。非無百寮怖畏之難。遷都儀式。宣有天察<sup>(4)</sup>」とあり、鬼門を特に忌避していたことが伺える。

そこで、「延暦七年。博教大師向長岡京。咫尺龍顏奏言。所學教法。是善惡不二。邪正一如。魔界即佛。男之所談也。謂建第一義諦常安穩之都。專嘗帝德偏崇佛法於最澄者。天子本命之伽藍致鎮護國家之誓護<sup>(5)</sup>」と、延暦7年に伝教大師が長岡京に赴き、鎮護国家のために、伽藍建立のことを奏上した、とも書いている。

そういったところから出発し、比叡山は皇城の鬼門にあたるので、その災いを避けるために延暦寺を建てたという説が生み出されたのである。つまり、比叡山延暦寺は、都の鬼門を護る要塞であった。

その「延暦寺は都の鬼門を護る存在である」という説から、「延暦寺がどのような存在から都を護っているのか」という証明のため、立山に地獄が作り出された」という可能性を、筆者は提示する。



そもそも、地獄というのは、死後人がどのような場所に行きどのような苦しみを受けるのか、そしてその苦しみから逃れるためにはどうしたらいいのか、寺が自らの力を示すために語られる場合が多い。そして立山の場合も、延暦寺の力を示すために生み出されたのではないだろうか。

図 11 の地図を見ていただきたい。都から見て鬼門（北東）の方角に比叡山延暦寺があり、さらに比叡山延暦寺を越えて鬼門の方角へ進んでいくと、立山に行き当たる。



図 11 延暦寺～立山～佐渡の位置図

つまり延暦寺は、自分達よりさらに北東に位置する立山の景観が地獄の様相と、なおかつ「人間が亡くなった後、魂は山へとほる」という山中他界観と一致することを知り、自分達の力を示すために立山地獄を利用したのである。では何故、都から近い他の山ではなく、遠い立山を利用したのか。その理由は、次の論点へと移る。

## 第2節 「六月晦大祓」より

当時の都では、不浄なもの・恐ろしいものを自分達の身近に置かず、外へ追い出す傾向にあった。それは、「六月晦大祓」の内容からうかがい知ることができる。

(原文)

祓給比乎清給事、高山・短山之末与理、佐久那太理尔落多支速川能瀬坐瀬織津比咩止云神、大

海原尔持出奈武。

如此持出往波、荒潮之塩乃八百道乃八塩道之塩乃八百会尔座須速開都咩止云神、持可吞可吞弓牟。如此久可吞弓波、气吹戸坐須気吹戸主止云神、根国・底国尔气吹放弓牟。

如此久気吹放弓波、根国・底国尔坐速佐須良比咩登云神、持佐須良比失弓牟<sup>(6)</sup>。

(訳文)

祓い清めて下さる罪（具体的には罪を付けた祓えの品物）を、高い山や低い山の頂から勢いよく落下してさか巻き流れる速い川の瀬においでになる織津比咩という神様が、川から大海原へ持ち出してしまうであろう。

このように持ち出して行ってしまうえば、激しい潮流の沢山の水路が一所に集合して渦をなしている所においでになる速開都咩という神様が、それをかっかっかと音を立てて呑み込んでしまうであろう。

このようにかっかっかと呑み込んでしまえば、息を吹き出す戸口の所においでになる気吹戸主という神様が、それを地底の闇黒の世界へ息で吹いて放ちやってしまうであろう。

このように息で吹いて放ちやってしまうえば、地底の闇黒の世界においでになる速佐須良比咩という神様が、それを持ってどこも知れずうろつき廻って、ついにすっかりなくしてしまうであろう<sup>(7)</sup>。

このように「六月晦大祓」にて、罪（具体的には罪を付けた祓えの品物）は、高い山から低い山へ、川から大海原へ、潮流が渦をなして飲み込み暗黒の世界へ、そして地底の世界で消えてなくなっていく。これから見て分かる通り、当時の人々とはとにかく、己の身に宿ったり周囲に存在する穢れを自分達から遠ざけたがったのである。

つまり、延暦寺が同じ丑寅（北東）の方角であっても、近くにある山ではなく立山に地獄を設定した理由もここにあると私は推測する。地獄というものは罪を犯した亡者達が集まり、責め苦を受ける場所である。そのため、都の人々は地獄を恐れ、忌避した。そのため延暦寺も、都から遠く離れた立山に地獄を設定したのである。

さらに、延暦寺が立山に地獄を設定した理由が

もう一つ存在する。

### 第3節 「延喜式」より

立山に地獄が設定された第3の理由、それは「延喜式」に書かれている「穢れ及び鬼が住む国」とされている佐渡と同じ方向に立山が存在していることである。

「延喜式卷十六・陰陽寮」には、「穢悪伎疫鬼能所村々爾藏里隱布留乎波。千里之外。四方之界。東方陸奥。西方遠值嘉。南方土佐。北方佐渡與里乎知能所乎。奈牟多知疫鬼之住加登定賜比行賜氏<sup>(8)</sup>」。とあり、東は陸奥、西は遠值嘉、南は土佐、そして北は佐渡といったふうにそれぞれ千里離れた場所に鬼、もしくは穢れが住む国が存在している。そして注目すべきは、北方に位置している佐渡である。

図11から見て分かる通り、佐渡と立山は都から見てほぼ同一方向に位置しており、そのため同一視されたのではないかと推測する。

## 終章 結論 —結びにかえて—

以上3点が、私から見た都から見た立山地獄が設定された理由である。

まとめると、

- ① 仏教より伝え聞く地獄の様相が、立山の自然景観と一致。
- ② 古代の人々が元々持っていた山中他界観に基づく。
- ③ 都から遙か離れた場所＝自分達が住む世界の垂直・水平方向の延長線上の場所
- ④ 都から鬼門の方角に位置する。
- ⑤ 都から遠く離れた場所に位置する。
- ⑥ 「鬼や穢れが住む場所」とされる佐渡と同一方向にある。

と理由が総合して、立山に地獄があるという概念が生み出されたのだと考える。つまり立山は、「地獄がある山」と考えられるのに絶好の条件を有していたのである。そのため、都を護る立場である延暦寺はそれを利用し、「自分達が都から護っている存在」として「大日本法華験記」や「今昔物語」などの仏教説話集に立山地獄の様相やその立山から娘を助ける話を書き、都に「立山＝地獄

が存在する山」という印象を植え付けたのだろう。

そして都に「立山＝地獄が存在する山」という概念が定着した根拠として、「貴船の本地」と「天狗の内裏」を挙げる。

「貴船の本地」では、

おほるとの、さらはかたりて、きかせんとて。これよりきたへ、まいりていけへは。くらまの御てらとてあり。それより、ほそみちあり、それをはるかに、ゆきてみれば。そうしやうがたにとてあり。

そのをくに、大なるいけあり。そのなを、みぞろいけと申也。そのをくに、大きなあなあり。そのあなよりゆけは國あり。其國のなを、きこくといふ<sup>(9)</sup>。

とあり、貴船にある谷の岩間を丑寅北東の鬼門の方角に進んだところにある「岩屋」のなかを五十里ほど歩いたところに、「鬼国」がある、と語られている。同時に、「天狗の内裏」にも似たような記述が見られ、鞍馬から北東の方角へ進むと天狗の内裏があるという。

そして図12を見てもらえば分かる通り、貴船及び鞍馬から見て鬼門、北東の方角に立山が位置している。つまり、「貴船の本地」及び「天狗の内裏」が成立した頃には既に、延暦寺によって「立山＝地獄が存在する山」という概念が定着していたと考える。

そして調べていく内に、気付いたことが一つある。

前述で説明した通り、立山曼荼羅は山から追い出されて全国各地に立山信仰を普及して回ることとなった芦峯寺衆徒が、誰にでも分かりやすく絵解きするために作られたものである。そして中世で発展を見せた地獄・六道絵も、寺が死後の世界や地獄から逃れるための方法を説明するために描かれたものだという。

さらに、地獄絵が流行した理由として保元・平治の乱による都の混乱と古代貴族が今まで築いてきた権威が地に堕ちたことによる心理的衝撃が背景にある。そして現代になって地獄について描かれた絵本や漫画が流行るようになったのも、現代日本社会に対する人々の不安が背景にあるかもしれない。



図12 貴船・鞍馬—立山の位置図

何を言いたいのかということ、こういった現象は時代を問わず繰り返す、ということである。人々は常に幸福と不安の間を行き来しており、精神的不安を抱くとより現実を直視し、死後のさらなる苦しみから逃れようとする。そのため、その度に地獄が際立って注目されるのである。

現在、はじまりでも述べたように、地元民でも知る者が少ない立山信仰・立山地獄であるが、もし今の日本が不安定な状況に陥ったら、再び立山信仰が流行する時代が来るのかもしれない。

#### 注

- (1) 足利健亮『地図から読む歴史』講談社、2012、4頁。
- (2) 大曾根章介校注「大日本法華験記卷下第百廿四 越中国立山の女人」『日本思想史大系7』岩波書店、1974、565頁。
- (3) 福江充『立山曼荼羅——絵解きと信仰の世界』法藏館、2005、37頁。
- (4) 佛書刊行會編纂「延暦寺護国縁起卷中」『大日本仏教全書126』佛書刊行會、1914、421頁。
- (5) 同上
- (6) 青木紀元「六月晦大祓」『祝詞全評釈—延喜式祝詞中臣寿詞』右文書院、2000、89～90頁。
- (7) 同上、244～245頁。
- (8) 「延喜式 中篇 陰陽寮」『新訂増補・国史大

系』吉川弘文館、1972、443頁。

- (9) 横山重・松本隆信編「貴船の本地」『室町時代物語大成 第九』角川書店、1981、72頁。

#### 参考文献

- 足利健亮『地図から読む歴史』講談社、2012。
- 家永三郎「六道絵とその歴史」『新修日本絵巻物全集第7巻』角川書店、1976、3～13頁。
- 岩鼻通明「立山マンダラにみる聖と俗のコスモロジー」『絵図のコスモロジー 下巻』地人書房、1989、223～238頁。
- 神田千里『宗教で読む戦国時代』講談社、2010。
- ケラー・キンブロー「天狗の話—『天狗の内裏』における六道案内」『第45回国際日本文化研究センター 国際研究集会「怪異・妖怪文化の伝統と創造—ウチとソトの視点から—」予稿集』国際日本文化研究センター、2013、78～83頁。
- 島津久基『義経伝説と文学』明治書院、1935。
- 『地獄絵を旅する——残酷・餓鬼・病・死体』平凡社、2013。
- 富山県立山博物館編『立山の地母神——おんばさま』富山県立山博物館、2009。
- 志村有弘・諏訪春雄編『日本説話伝説大事典』勉誠出版、2000、428～431頁。
- 速水侑『地獄と極楽——『往生要集』と貴族社会』吉川弘文館、1998。
- 福江充『立山曼荼羅——絵解きと信仰の世界』法藏館、2005。
- 福江充『立山信仰と布橋大灌頂法会——加賀藩芦峯寺衆徒の宗教儀礼と立山曼荼羅』桂書房、2006。
- 福江充「立山信仰と立山曼荼羅の解説」、<http://www2.ocn.ne.jp/~tomoyal/>